

アメリカの出産から子育て

古川藍子

【目的】将来、助産師になりたいと思っている。多くの妊婦さんや患者さんに安心してお産や治療に臨んでもらうためには、広い視野と多くの知識を持たなければならない。ホームステイを機に、外国の医療の現場はどうなっているのかを知りたいと思い、「アメリカの出産から子育て」をテーマに学ぶことにした。

【現場見学】医療関係のソフトウェアを開発しているホストファーザーの案内で The University of Kansas Medical Center という「大学病院」を訪問



した。病院には 18～19 世紀のアメリカやドイツの医療についての展



示室があり、現地の大学院生の案内で見学した。当時の車いすや分娩台、ナース服などの展示物を見ながら医療の変遷について教えてもらった。現在の大学病院の病棟や診療科についての説明も受けた。プライバシーの問題があり、院内を見学することはできなかったが、アメリカでも最先端の医療設備が整っている病院のすごさを感じることができた。

ホストファーザーは胎児やお母さんの心拍や酸素濃度などを計測する器具のソフトウェアを開発している。自分の子どもが生まれた時も自らが開発したソフトで妻や赤ちゃんの健康状態を把握していたという。

【アメリカでのお産について】アメリカで息子と娘の2人のお産を経験しているホストマザーにインタビューした。出産前日の夜まで働いていた。一般的に破水や陣痛が始まるなど出産の兆候があってから病院に向かう。普通に生活していて兆候がでてから病院に行くので自然に出産できたという。医療費が高く退院が早い。日本ほど慎重ではなくすぐ退院させられる。入院期間が短いので沐浴など必要なことはほぼ教えてもらえなく独学だった。アメリカでは6割ぐらいが無痛分娩、2.5割が帝王切開。医療訴訟が多いためリスクを伴うお産の場合はほぼ帝王切開になるのだという。母親の産後ケアが少ない。日本は5日ぐらい入院し体力の回復が図れるが、アメリカまでは出産後2日で退院。ケアがないので体がボロボロになる。

出産して5週間で仕事に復帰するものの、子どもが熱を出したときなど職場が臨機応変に対応してくれるので安心だったという。働いているところに保育所があったのでとても

よかったという。日本では出産や子育てを理由に離職する人が多いが、アメリカでは子育てしながら働ける環境が整っている。

子育ては日本のほうがしやすい。治安面で日本とは違い外出先で子どもから目を離せない。子ども一人でトイレに行かせられないのだという。学校も車通学。安全面の配慮が欠かせない。

【感じたこと】アメリカでは出産して48時間後には退院すると聞いてびっくりした。日本では考えられないと思った。無痛分娩や帝王切開については知識があまりなかったので、これからいろいろ勉強しなければと思った。また、病院に入るときのセキュリティーが高いのに驚いた。日本では特に何もチェックされずに院内に入ることができるのでその違いは大きい。あと「銃禁止」のマークがあった。銃の国なのだと改めて感じた。

オペ室などを詳しく見学することはできなかったが、アメリカの医療現場を肌で感じることはできたのは大きな意義があったと思う。日本の医療についてもほとんど知識がないということも分かった。医療についてもっと知りたい、学びたいと強く感じた。これらの経験を将来に役立てていきたい。